

イーグル・アイ

2008(平成20)年10月18日鑑賞〈梅田ピカデリー〉



第1章

目立ったのは米中合作

監督＝D・J・カルーツ／製作総指揮＝スティーブン・スピルバーグ、エドワード・L・マクドネル／原案＝ダン・マクダーモット／出演＝シャイア・ラブーフ／ミシェル・モナハン／ロザリオ・ドーソン／マイケル・チクリス／アンソニー・マッキー／ビリー・ボブ・ソーントン（角川映画、角川エンタテインメント配給／2008年アメリカ映画／117分）

……スティーブン・スピルバーグ監督のアイデアを映画化した『イーグル・アイ』には、チャールズ・チャップリンの『モダン・タイムス』（36年）との共通点がある。それは一体ナニ……？ 双子の弟ジェリーとシングルマザーのレイチェルが、2人して「女の声」の指示に絶対的に服従させられたのは、一体ナゼ？ ド派手なカーチェイス、国会議事堂、コード名「イーグル・アイ」の勇姿（？）そして想像を絶するクライマックスシーンなど、映画の見どころはいっぱい。「ケータイ命」のようにメールチェックに忙しいあなたも、この映画を観ればその価値観が少し修正されるかも……？

スピルバーグにチャップリンとの共通点を発見！

「イーグル・アイ」とは「鷲の目」。ケータイやGPSをはじめとするハイテク機器に囲まれて生活している私たちは、一見テクノロジーの利便性を享受しているように見えながら、ホントはそのテクノロジーに支配されているのでは？

1936年の『モダン・タイムス』はチャールズ・チャップリンの傑作だが、チャップリンはこの作品で、機械を使うはずの人間が、機械に使われているのではないかという警鐘を鳴らした。そう考えると、『イーグル・アイ』によって、最先端テクノロジーが人間の脅威になるのではという警鐘を鳴らしたスティーブン・スピルバーグは、チャップリンと共通点がある……。

なぜ、この2人が？

『イーグル・アイ』の一方の主人公は、スピルバーグ監督の秘蔵っ子として『トランスフォーマー』（07年）、『ディスタービア』（07年）、『インディ・ジョーンズ クリスタル・スカルの王国』（08年）で大活躍を続けているシャイア・ラブーフ演ずるジェリー・ショー。ジェリーは今ドキの多くの日本の若者と同じように定職につかず、気ままな生活を営んでいる若者だが、一卵性双生児の兄イーサンの死亡を聞かされ、故郷での葬儀に立ち会った後に、とんでもない事件に巻き込まれることに。

もう1人の主人公レイチェル・ホロマン（ミシェル・モナハン）はでき損ないの夫と離婚し、今は一人息子のサムを守りながら力強く生きているシングルマザー。そのレイチェルも、サムを演奏旅行に送り出した後、ジェリーと同じようにとんでもない事件に巻き込まれることに。そこで問題は、なぜジェリーとレイチェルがターゲットに選ばれたのかということだが、それはストーリー展開の中で少しずつ明らかに。

ジェリーもレイチェルも散々な目に

イーサンの葬儀を終えてアパートへ戻ろうとしたジェリーがATMに立ち寄ると、なぜかジェリーの口座には考えられない金額の残高が。さらに部屋の中に入ると、そこには銃や無線機器、化学薬品そして偽造パスポートなどがいっぱい。これは一体ナニ？ ナニが起きているの？ そう思ったジェリーのケータイに入った女の声は、「30秒でFBIが到着する。今すぐ逃げなさい」という驚くべきもの。そして、事態はその電話のとおり……。

他方、息子を演奏旅行に送り出した後、女友達と飲もうとしていたレイチェルのケータイで告げられたのは、「息子のために命を懸けられるか」という不気味な女の声。拒否することができず、女の声の命令に従って、レイチェルが車に乗り込んでいたところ、そこに飛び込んできたのが、女の声によって逮捕されたFBIからの脱出、女の声に命じられるままの地下鉄での脱出など、散々な目にあわされてきたジェリー。

女の声は一体ダレ？

したがって、飛び込んだ車の中に女（レイチェル）の姿を発見したジェリーが、「お前が電話の女の声の主か！」と考えたのは当然だが、それは大きな誤解。他方、

レイチェルもジェリーを見て「あなたは一体何を企んでいるの？」と考えたのは当然だが、これも大きな誤解。

そんな風に互いの立場を十分理解する間もなく、2人は迫ってくるFBIの捜査網から逃れるべく、レイチェルの運転で何ともハチャメチャなカーチェイスを展開することに。姿の見えない女の声の指示にただ従うだけのカーチェイスだが、どこかで遠隔操作をしているような女の声は考えられないほどの確であるうえ、信号の色や系統まで自由にコントロールしているから、ジェリーはビックリ。

この女は一体ダレ？ そして、どこからどんな風にそんな指示を出しているの？ それがこの映画のテーマ。したがって、軽々しくそれをネタばれにすることができないのは当然。しかし、この後の説明のため、「彼女」の「名前」だけバラせば、それは「アリア」。さて、アリアの正体は？ それはじっくりあなた自身の目で……。

国防長官の役割は？ イーグル・アイとは？

大統領制をとるアメリカにおける国防長官は、陸軍、海軍、空軍の三長官を統括、指揮する重要な役職で、第2次世界大戦後創設されたもの。映画の冒頭、不十分な情報のまま重要テロリストに対して攻撃を仕掛けるべきか、それとも見送るべきかの重大な決断を迫られるシーンが登場する。2001年の9・11テロの後「不朽の自由作戦」と名づけられたアフガニスタンへの侵攻を決断したブッシュ大統領も、そんな苦渋の決断をしたはず。そしてまた、1962年のキューバ危機におけるケネディ大統領の決断も同じだったはず。この映画でジェフ・カリスター国防長官（マイケル・チクリス）が頼っているのは、情報分析のシステム「イーグル・アイ」。葬儀のために出席しているだけの可能性があるという「イーグル・アイ」の分析を尊重し、カリスター長官はテロリストへの攻撃には踏み切れないとの判断を大統領に述べたが、大統領の決断は「GO！」。その結果起きたのが、多数の民間人を殺害したアメリカに対する猛抗議とテロの予告だった。そんな結果を見れば、大統領のあの決断はまちがいで、カリスター長官の判断が正しかったわけだが、国防長官に対してあのように的確な情報提供をしながら、それを無視された「イーグル・アイ」の「気持」は……？

FBI捜査官と空軍特別捜査官との縄張り争いは？

逮捕したジェリーをテロリストと断定し、尋問するのは、テロ対策専門のFBI捜



© 2008 DREAMWORKS LLC. All Rights Reserved.

査官トーマス・モーガン（ビリー・ボブ・ソントン）。ジェリーのアパートから発見された膨大な物証は、ジェリーがテロリストであることを立証するに十分。これはきっと、国防総省に勤務していた兄イーサンの死亡と関連がある、そう読んだモーガンのジェリーに対する追及が執拗なものになったのは当然だ。

他方、女性ながら空軍の特別捜査官ゾーイ・ペRez（ロザリオ・ドーソン）は、FBIとは全く別の視点からジェリーの捜査に乗り出すことに。こんな場合必ず生まれるのが、FBIと空軍との縄張り争いとセクト主義。例によって、今回もそんな姿が登場。そう思っていると、意外にも2人は……？

いよいよ「イーグル・アイ」の核心へ

映画中盤には、ジェリーの逮捕に熱心に取り組んでいたペRez捜査官が、空軍の「憲兵隊」によって身柄を拘束されるシーンが登場する。私はこれによって「ペRez捜査官の活躍はこれまで」と思ったのだが、実はそれは逆。ペRez捜査官の拘束は、実はペRez捜査官をカリスター国防長官のスタッフに入れるためだったようだ。その

結果、ペレズ捜査官はカリスター国防長官の下で「イーグル・アイ」に関する重大な任務に当たっていたスコット・ボウマン少佐（アンソニー・マッキー）と共に、今新しい任務に就くことに。

さあ、コードネーム「イーグル・アイ」とは一体どんなミッション？ その核心に迫っていくペレズ捜査官の目には、驚くべき実態が……。

後半のポイントはブリーフケース

女の声に従うしか道はない。さまざまな経験によって、イヤイヤながらそんな学習をしたジェリーとレイチェルは、「女の声」に命じられるまま銃を振りかざしての強盗まで実行。それによって、奪ったのは1個のブリーフケースだが、さてその中には何が？

さらに、女の声の指示のままバスの中に逃げ込んだ2人は、ブリーフケースに備えつけられたデジタルタイマーが刻む時間を不気味な気持ちで見いていたが、この残り時間がゼロになった時には一体ナニが？

クライマックスは国会議事堂内の代議員フロア

日本での国会冒頭における総理大臣の所信表明演説に相当するのが、アメリカでは大統領による一般教書演説？ 『イーグル・アイ』のクライマックスの舞台は、大統領がそんな一般教書演説を行う国会議事堂内の代議員フロアだ。ちなみに、アメリカにはこの国会議事堂と両議会のオフィスビル群は長いトンネルで結ばれ、トンネル内には「アメリカ合衆国議会地下鉄」がシャトル運転しているが、この映画にはそれも登場するから、お見逃しなく。

それはともかく、銃社会のアメリカではケネディ大統領の暗殺事件を持ち出すまでもなく、政府要人は常に暗殺の危険と隣り合わせ。しかし、この映画のクライマックスに訪れる暗殺計画は、過去のどんなそれよりも大規模で阻止できる可能性の少ないもの。さあ、そんな厳しい局面の中、ペレズ捜査官とボウマン少佐はどんな行動を？ また、サムたちの子供楽団がアメリカ国歌を演奏している代議員フロアの中に入ったジェリーとレイチェルは、どんな行動を？ そんなクライマックスシーンは、あなた自身の目でしっかりと。

2008(平成20)年10月19日記